

北陸新幹線開業記念

工芸にみる石川の巨匠 — 芸術院会員・人間国宝の名品選 —



前 大峰《水のほとり沈金飾篋》
昭和22年 石川県輪島漆芸美術館蔵

- 新年のご挨拶
- 新春を寿ぐ
- 新春優品選【古美術】
- 新春優品選【工芸】
- 干支の造形

- 講演会記録「鴨居玲を語る」
- 映像ギャラリー
- 展覧会回顧「石川の近代彫刻をたずねて」
- 1月の行事予定
- ミュージアムショップ通信

2016年

年始のご挨拶

石川県立美術館 館長 嶋崎 丞

1月4日(月)～2月14日(日) 会期中無休

あけましておめでとうございます。

平成二十七年も終わり、新しい年を迎えました。昨年三月十四日は北陸新幹線も開業し、予想以上に多くの観光客が石川・金沢の地へ訪れられて大変賑わいました。私共もそうした方々をお迎えするために、この地でなければ鑑賞することのできない企画を考えるべきとして、春には「百万石の名宝」展を、秋には「鴨居玲」展を開催したことは周知の通りです。暦年では二十七年が終わりましたが、新幹線開業年度の最後を飾る企画展として、一月四日から二月十四日まで「工芸にみる石川の巨匠」展を開催します。

ご存知の通り、新幹線開業に向けて金沢駅が全く新しくなりました。駅のコンコースの柱には、石川県を代表する工芸作家の作品が飾られてまるでミニ美術館のようだとマスコミに報道されたほど、石川県の美術分野のなかでは工芸が突出する資質の高さを誇っています。そこで本展では石川県在住やゆかりの人びとで、文化勲章受章者、文化

前号でもご案内しましたように、本展に出品する予定の作品は、石川の工芸を代表する日本芸術院会員六名、重要無形文化財保持者二十二人(一名重複)の計約一〇〇点を予定しています。各作家の主な出品作は次のとおりです。

※作家の配列は、日本芸術院会員の就任順、重要無形文化財保持者の認定順

松田権六【漆芸(蒔絵)】《蓬萊之棚》昭和十九年 当館蔵

蓮田修吾郎【金属造型】《白銅浮彫「聖歌の碑」》昭和五十七年 当館蔵

二代 浅蔵五十吉【陶芸】《釉彩 瑞鳥の譜 飾皿》昭和四十三年 小松市立博物館蔵

十代 大樋長左衛門【陶芸】《壺・指頭絵「虎吼」》平成二十一年 当館蔵

三谷吾一【漆芸】《「月夜野」》平成七年 石川県輪島漆芸美術館蔵

功労者、芸術院会員、重要無形文化財保持者(人間国宝)など、工芸界でトップの座を占めた作家を、物語者を含め二十二名一〇三点で構成し超豪華版の企画展を開催することになりました。まさに二十八年の年頭を飾るにふさわしい見事な展観となりました。石川の個性、特色を十分に堪能いただけるものと確信しています。

昨年春より施行された「いしかわ文化振興条例」により、毎年十月第三日曜日(昨年十月十八日)が「いしかわ文化の日」と定められ、県内の博物館施設の常設展示部門が無料開放されることになりました。これより先、当館はすでに毎月第一月曜を無料開放しており、多くの常連入館者を迎えています。いしかわ文化の日はとくに多くの入館者がありました。このことは博物館同士が互いに連携し、行動を共にすることの重要さを示唆したものと考えられます。本年も県民の皆様のご要望にお応えすべく努力して参りたいと思っております。

武腰敏昭【陶芸】《無鉛釉 王魚》平成二十六年 個人蔵

前大峰【漆芸(沈金)】《水のほとり沈金飾篋》昭和二十二年 石川県輪島漆芸美術館蔵

木村雨山【染織(友禅)】《染色童児遊ぶ屏風》昭和十七年 個人蔵

初代 魚住為菜【金工(銅鑼)】《砂張銅鑼 銘青海波》昭和十二年 小松市立博物館蔵「小松市指定有形文化財」

氷見晃堂【木工芸】《桑造木象嵌飾棚》昭和二十四年 石川県七尾美術館蔵

赤地友哉【漆芸(髹漆)】《曲輪造毬形朱喰籠》昭和五十九年 金沢市立中村記念美術館蔵

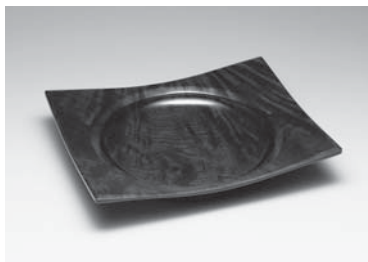
隅谷正峯【刀剣(日本刀)】《大身槍 日本号写》昭和四十七年 当館蔵

大場松魚【漆芸(蒔絵)】《平文薄の棚》昭和五十三年 当館蔵

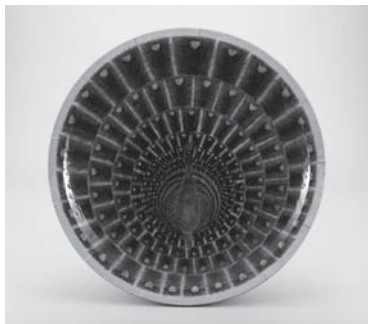
工芸にみる石川の巨匠

— 芸術院会員・人間国宝の名品選 —

主催：石川県立美術館



川北良造《桑造方盛器》
平成24年 個人蔵



二代浅蔵五十吉《袖彩 瑞鳥の譜 飾皿》
昭和43年 小松市立博物館蔵

- 寺井直次【漆芸(蒔絵)】《蒔絵箱「鳴き渡る」》昭和五十五年 当館蔵
- 西出大三【截金】《截金彩色木彫合子「華鳥」》昭和五十五年 当館蔵
- 羽田登喜男【染織(友禅)】《友禅訪問着「群鴛錦秋」》平成二年 当館蔵
- 川北良造【木工芸】《桑造方盛器》平成二十四年 個人蔵
- 塩多慶四郎【漆芸(髹漆)】《乾漆稜線文器》昭和六十二年 個人蔵
- 三代徳田八十吉【陶芸(彩釉磁器)】《耀彩鉢「極光」》平成四年 当館蔵
- 前史雄【漆芸(沈金)】《竹叢》平成十四年 石川県立輪島漆芸技術研修所蔵
- 吉田美統【陶芸(釉裏金彩)】《釉裏金彩大山蓮花文鉢》平成十二年 当館蔵
- 三代 魚住為楽【金工(銅鑼)】《砂張皆具(水指・杓立・建水・蓋置)》昭和六十年 金沢市立中村記念美術館蔵
- 中川 衛【金工(彫金)】《象嵌臙銀花器「夕映え」》平成二十三年 金沢市立安江金箔工芸館蔵
- 小森邦衛【漆芸(髹漆)】《網代重箱「暁天」》平成四年 当館蔵
- 二塚長生【染織(友禅)】《友禅着物「寒瀑」》平成三年 当館蔵
- 中野孝一【漆芸(蒔絵)】《栗鼠に山葡萄八角箱》平成二十年 個人蔵
- 灰外達夫【木工芸】《神代櫻挽曲造飾箱》平成二十六年 当館蔵

◆ 関連行事

【講演会】

1月17日(日)「石川の工芸―巨匠たちの思い出・裏話」
講師・嶋崎 丞(石川県立美術館館長)
時間・午後1時30分から
場所・美術館ホール(入場無料・予約不要)

【映画上映会】特集「石川の巨匠とそのわざ」

1月10日(日) 寺井直次・西出大三
1月24日(日) 大場松魚・羽田登喜男
1月31日(日) 武腰敏昭・氷見晃堂
2月7日(日) 二塚長生
時間・いずれの日程も午後1時30分から
場所・美術館ホール(入場無料・予約不要)

◆ ギャラリートーク

担当学芸員が、出展作品の解説を行います。
時間・会期中の毎週日曜日午前11時から
場所・一階企画展示室(要観覧料・予約不要)

◆ 観覧料

一般	大学生	小中高生
八〇〇円(六〇〇円)	六〇〇円(四〇〇円)	二〇〇円(一〇〇円)

※コレクション展もご覧いただけます。
()内は二〇名以上の団体料金です。



隅谷正峯《大身槍 日本号写》(部分)
昭和47年 当館蔵

第2展示室

新春優品選【古美術】

前期: 12月10日(木)~27日(日)

後期: 1月4日(月)~2月14日(日)

今回の展示は、新年を迎え一部作品の展示替えを行い後期となりました。今回の主要作品は、重要文化財《西湖図》《秋月等観》です。筆者の秋月等観(？)一五二〇)は薩摩出身で元は島津氏の家臣で、のちに出家して山口に赴き雪舟の弟子となった室町時代後期の画僧です。西湖とは中国浙江省杭州市にある湖で、画題として好まれる景勝地です。作品の左上に「杭州西湖之図、於北京会同館作此図、弘治玖年閏三月拾三日」の書き込みがあり、秋月が明の弘治九年(一四九六・日本の明応五年)に、中国北京の会同館で描いたことがわかる貴重な作品です。

この作品は平成二十五年度に本格的な修復を行

前田育徳会尊經閣文庫分館

新春を寿ぐ

12月10日(木)~2月14日(日)

休館日: 12月28日(月)~1月3日(日)

今回は、現在展示中あるいは一月十六日からの後期に展示される作品に見られる、広義の吉祥モチーフをいくつか紹介します。最初は元時代十四世紀の画家・王若水の《花鳥図》です。この作品は三幅対となっており、中絵が松竹梅につがいの鶴、右が太湖石、胡蝶、牡丹、寿帯鳥、左が菊に三羽のカササギ、胡蝶、雀となっています。植物や鳥の描写は図鑑のように正確ではありませんが、いずれも中国や日本において長命、富貴、榮進、慶事などを象徴する画題として定着しています。次は、加賀藩十一代藩主・前田治脩が所用した《日の出に立浪文陣羽織》です。伝統的な「旭日東昇」の画題をあしらった本作は、新たな年の希望と繁榮の願いを託す意味で、新春にふさわしいものといえます。

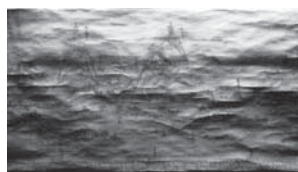
続いて、複数の作品に用いられている梅の意匠に注目します。梅の異称は「好文木」で、中国・晋の武帝が学問に親しむと花が開き、学問をやめると花が開かなかつたという故事に由来するそうです。学問の神・天神となった菅原道真が梅を特に愛したことも、この故事に関係がありそうです。そして春のさきがけとして冬の闇を破って咲く梅は、仏教では迷いの闇を解脱した悟りの光明を象徴します。菅原道真を先祖とする前田家の家紋が梅鉢であることから、前田家は「梅花天目」と通称される《玳皮盞天目茶碗》や、「織部緞子」として知られる名物裂《流水梅花文様緞子》を特別な思いで珍重したことでしょう。また、天神信仰と禪が結びついた《渡唐天神像》が、梅の枝を持つ姿で描かれている理由もわかります。

い、修復後初公開となります。今回の修復では、作品全体にわたる多数の横折れや亀裂、汚損、さらには表具裂の劣化や糊離れ、裏打ちの浮きなどを修復しました。修復の成果として、享保十五年(一七三〇)に本格的な修復が行われたことが判明しました。作品とともに修復工程の状況を合わせてパネルで紹介いたします。なお修復作業は(一財)石川県文化財保存修復協会が行いました。

この作品は、能登の守護大名・畠山氏の流れをくむ故畠山一清氏(荏原製作所創業者)が昭和三十四年(一九五九)の旧石川県美術館開館に際し、対幅に仕立てられている元信・探幽・興以の《西湖図》とともにご寄附いただいたものです。



重文《西湖図》秋月等観



修復前《西湖図》



王若水《花鳥図》

鴨居玲を語る

講師：長谷川徳七氏・長谷川智恵子氏(公益財団法人日動美術財団笠間日動美術館館長・副館長)

「没後四十年 鴨居玲展 踊り候え」の初日、長谷川徳七、智恵子夫妻によるオープニングトークショーが行われました。日動画廊の社長・副社長として、陰になり日向になり鴨居を支えた二人だからこそ語られる、貴重なエピソードの数々。あつという間の一時間から、ここでは鴨居との「出会い」と「別れ」について抜粋し、ご紹介します。

長谷川智恵子氏

私が鴨居と初めて会ったのは、東京で初めての個展でした(昭和四十三年、当時鴨居四十歳)。最初の印象は「格好よくてすてきな男性」というものでした。背が高く、鼻筋の通った顔立ちで外国の男性にひけをとらない魅力を持っていました。サービス精神も旺盛で個展に来てくださっているだれに対しても優しく愛想がいい。当時まだ画家たちとのつきあいに不慣れだった私にも気遣いを忘れない人でした。しかし、実のところ鴨居は極度の恥ずかしがり屋で、脇の下に汗をにじませながら対応していたのですね。でもそんなところは見えたりしない。これは一面、鴨居の本質を表していたと思います。

長谷川徳七氏

亡くなったときの話になりますが、一九八五年九月七日の未明に「先生が亡くなった」と電話がありました。私は「ばかをいうな」と相手をせずに電話を切った。というのもその数時間前、銀座でポーラの社長たちと飲んでいるところへ、本人から「ポーラの育毛剤が届いたけど、どうやって使うの？」なんて電話がかかってきて、その時は



大いに盛りあがったからです。しかし電話を切った後、睡眠薬を飲んだのらしい。あのときは本当に突然で信じることができなかった。(講演会の要旨を当館の文責でまとめたものです)

映像ギャラリー

一月は企画展にあわせ、「石川の巨匠とそのわざ」と題して、工芸の各分野で活躍する石川の巨匠をご紹介します。その顔ぶれをお見せいたしましょう。陶芸からは二代 浅藏五十吉氏・三代 徳田八十吉氏・十代 大樋長左衛門氏。漆芸は寺井直次氏、大場松魚氏・塩多慶四郎氏。また木工の灰外達夫氏・川北良造氏と、刀剣の隅谷正峯氏。以上九名の巨匠に関するビデオを上映します。

ビデオでは、制作工程を映像でご理解いただけるようになっていきます。絵画や彫刻に比べ、工芸作品はどう作られたのかイメージしにくいという方も、多くいらっしゃるのではないのでしょうか。実際の工程を目にすることで、作品に隠されたきめこまやかな気配り、想像以上の力仕事、繊細な意匠の数々に、あらためてはっとさせられることもしばしばです。また巨匠たちが語る作品への想いは、積み上げてきた経験にもとづく、実に力強いものです。そうした言葉を思い返しながら作品と向き合うと、また新たな見方が可能になります。

作品をじっくりご覧いただき、またその一点一点に秘められたわざの数々をご理解いただくことによって、だんだんと作品から受ける印象も変わっていくことでしょう。石川の巨匠たちのこと、より深くご理解いただけるこの機会、ぜひお気軽にご参加ください。

※上映リストは3ページの関連行事をご参照下さい。

石川の近代彫刻をたずねて

平成27年10月29日(木)～12月6日(日)

丁度三年前の彫刻部門の特別陳列で「能登の彫刻家たち」を開催しました。この展示は能登地区出身及び同地区で活躍の故人を含む能登ゆかりの作家の活動と作品を紹介する展示でしたが、今回は金沢／加賀地区ゆかりの作家の作品展示でした。展示を通して感じたことは、前号の繰り返しですが金沢／加賀地区の作家の作品だけでなく我が国の近代彫刻史と重なる動きを見せていて、さらに全国的に近代彫刻の先駆者と言つてもいい例が見えることです。当県は「工芸王国」と自称、全国的にみて各工芸分野にわたつて高い水準を示すことが特徴ですが、彫刻分野でも彫刻で使われる各素材にわたり作家の多彩な活動が見えます。

石川県全体の彫刻を総合して眺めてみますと、先ず他県の比較からみると、お隣富山県の井波木彫や高岡銅器のような地場産業との繋がりが少ない一方、金沢米大を代表とする美術教育機関もあり、作家各自の独自で自由な展開が見受けられるといえます。う。全般的に作風は、前衛・奇抜よりはオーソドックスで地道、粘り強く素朴な制作スタイルの作家が多いようです。また能登・加賀・金沢それぞれで、地勢や風土、気質などの違いもあつて各地域独自の特徴も窺えるようです。

さて彫刻美術の特徴として屋外の設置があげられます。県内でも屋外の公共空間で多くの野外彫刻を見ることができますが、皆様の身近にどんな彫刻作品があるか、興味を持っていただき、本県の彫刻にも関心が高まることを願っています。



1月の行事予定

10日(日)	■ビデオ上映会	午後1時30分	美術館ホール	入場無料
	炎と土と色 どうして蘇らすか文化勲章受章者・浅蔵五十吉	20分		
24日(日)	極光 人間国宝 寺井直次	(25分)		
	即是色 人間国宝 三代徳田八十吉	(24分)		
31日(日)	和光 人間国宝 大場松魚	(29分)		
	漆が呼ぶ里 — 人間国宝・塩多慶四郎 —	(24分)		
■土曜講座	邂逅 — 人間国宝・隅谷正峯 —	(24分)		
	午後1時30分	美術館講義室	聴講無料	
9日(土)	石川県の芸術院会員 人間国宝(一)	学芸専門員 寺川 和子		
16日(土)	米沢弘安	学芸員 中澤菜見子		
23日(土)	石川の文化財(二)	学芸第一課長 谷口 出		
30日(土)	石川県の芸術院会員 人間国宝(二)	学芸専門員 寺川 和子		

次回の展覧会

会期：二月十八日(木)～三月二十六日(土)

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室
「婚礼調度の美」	「春の優品選」【古美術】
第3・4・6展示室	第5展示室
「石川の美術 近代編」	「石川の工芸Ⅲ 食を彩る」

見ざる、聞かざる、言わざる

昭和14年(1939) 油彩、キャンバス 第26回二科展出品 110.9x143.8cm

田辺栄次郎 たなべ・えいじろう

明治43年(1910)~平成10年(1998)



金沢東山の真成寺に納められた木製の三猿、見ざる・聞かざる・言わざるをはじめ、様々な猿の人形が描かれています。真成寺は子供の守り神鬼子母神を祀ることでよく知られます。「見ざる・聞かざる・言わざる」は、見て見ぬ振りをするのが処世術と、幾分消極的な意味合いに受け取られがちですが、幼い子供には醜いものを見聞きさせずに育てよという教え述べたものとも言います。

右上には大きく奉納とあり、その下に昭和十四年、栄次郎と書かれているのは、サインの意味合いと、この絵を奉納するという意味を兼ねたものなのでしょう。では田辺は猿たちの造形の面白さと、人々の信仰の篤さに感じ入って本作を描いたのでしょうか。

この年、昭和十四年は、ヨーロッパでは第二次世界大戦が勃発し、日本は支那事変の拡大がとどまることなく、社会の統制は厳しさを増す一途でした。思うことの言えぬ時代のおろかしさ、情けなさ、それを本作に込めたとみるのがち過ぎでしょうか。一見ユーモラスな画面ですが、猿たちの表情は影を帯び毒を含んでいるようにも見えます。田辺はこの後、石川の美術団体や展覧会が大政翼賛会に組み込まれていく中、最後まで対峙し、金城画壇展を開催し続けるのです。反骨の画家というべきでしょう。



「工芸にみる石川の巨匠」
図録：税込2,000円

企画展「工芸にみる石川の巨匠」。全作品の写真に加え、巨匠ひとりひとりの経歴・作風を紹介する作家解説などを掲載した、展覧会図録を販売いたします。今回の図録は変形サイズ。お持ち帰りいただくのに便利な、コンパクトな形にしています。

表紙デザインはまだ案ですが、あえて明るい色づかいの中に作品の部分とっていただけよう工夫しました。チラシ・ポスターは同デザインの、背景が白。図録は巨匠らしい重厚さを高めたいと、背景を黒にしています。石川の近代工芸を優品で振り返る今回の企画展。そのすべてをおさめた豪華な図録は、必携です。

ミュージアムショップ通信

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日(1月は4日)

今月の開館時間

午前9:30~午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00~午後7:00 年中無休

1月の休館日は
1日(金・祝)~3日(日)

広告

片山津温泉

22種のお風呂で
おくつろぎ下さい

<http://www.kagakankoh-hotel.co.jp/>

日本海の海の幸や加賀の美食なら



片山津温泉
加賀観光ホテル

〒922-0412 石川県加賀市片山津温泉ウ41
加賀観光ホテル予約センター 受付時間 9時~20時

Tel. 0761-74-1101

石川県立美術館だより
第387号(毎月発行)
2016年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>